

千葉県学習協会 『資本論』講座ガイドンス

「現在の資本主義の諸矛盾と『資本論』」

千葉県学習協会会長・明海大学経済学部准教授

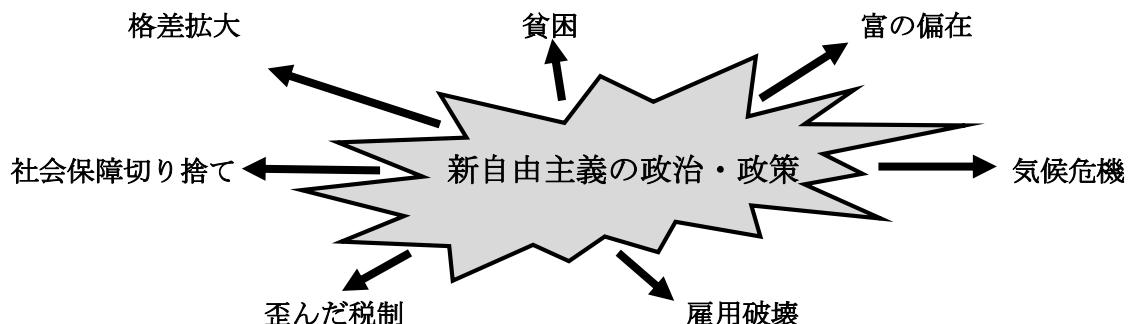
宮崎 礼二

1. 新自由主義

(1) 主張

- 公共的な分野を含むすべてを市場化、すべてを商品取引できるようにして儲けの機会を拡げる
 - 国家権力によって大企業・富裕層の儲けの機会を最大限保障
 - 生産資源としての労働者の利用の最大化と費用としての賃金を最小化
 - 大企業・富裕層に対する公助 + 国民・労働者の自助を推奨
- ★ 資本の自由を最大化するための政策思想
= 資本家の資本家による資本家のための政治的経済的実践

(2) 新自由主義の帰結



⇒ 自助と自己責任の「冷たい社会」

(3) 新自由主義の「新」とは？

- New ではなく Neo (復活・回帰) : Neo Liberalism

➡ 19世紀資本主義時代の復活・回帰

= 資本の全面的自由の時代の復活・回帰

★ 資本主義剥き出し → ますます資本とは何かの理解が不可欠な時代

2. 『資本論』の要諦

(1) 『資本論』の分析

18世紀末の産業革命を経て、資本家への富の蓄積と労働者階級の貧困化が先鋭化した19世紀イギリスの資本主義経済を対象に、資本の生産と再生産の過程=資本の運動法則を分析

(2) マルクス以前の経済学（古典派）との決定的相違

- 資本主義社会：歴史的な社会形態の1つ or 人類本来の社会形態？

= 資本主義社会に対する見方の相違

- 古典派（スマス、リカード）：資本主義社会を人類社会の絶対的な形態
⇒ 資本主義以前の古い社会は資本主義に発展する過程（資本主義にいたる未発展の形態）であり、資本主義に到達したらそれ以上の形態はない
= 人類社会の最高発展段階 = 人間社会の永久的な形態

「リカードは、ブルジョア的生産を、もっと明確に言えば資本主義的生産を、生産の絶対的な形態として把握している。」【『剩余価値学説史』全集⑩III p. 62】

- 資本主義の搾取形態（剩余労働の搾取）：自然的・理性的な形態

「このような、資本主義的生産において現れるところの、社会的労働の特定の独自な歴史的形態を、これらの経済学者たちは、一般的な永久的な形態、自然真理として言い表し、また、このような諸生産関係を、社会的労働の絶対的な（歴史的ではない）必然的な、自然にかなった理性的な諸関係として言い表すのである」

【同前 p. 340】

- マルクス：資本主義社会は人類の歴史のなかの一段階

⇒ 歴史的存在としての資本主義社会

『資本論』：資本主義社会以前との対比による資本主義の特徴・特質の可視化
+ 資本主義社会における諸矛盾の克服を展望

- ➡ エンゲルス【『反デューリング論』マルクス・エンゲルス全集⑩ p. 56】

「ブルジョア経済に対するこの批判を完全にやりとげるためには、生産・交換・分配の資本主義的形態を知っているだけでは十分でなかった。これに先行した諸形態や、発展の遅れている国ぐにに資本主義的形態と並んでいまなお存在している諸形態をも、同様に、せめて大まかにでも研究し比較しなければならなかった。そのような研究と比較とは、これまでのところ、全体として、ただマルクスだけが行った。だから、ブルジョア期以前の理論経済学についてこれまで確かめられたことも、ほとんどまったくマルクスのおかげなのである。」

- ➡ エンゲルス【「カール・マルクス」全集⑩ p. 104】

「とうとう1867年、ハンブルグで『資本論。経済学批判、第1巻』——マルクスの経済学的・社会主義的見解の基礎と、現存社会つまり資本主義的生産様式とその諸結果とにたいする彼の批判の大綱とを叙述したその主著——が出版され

た。」

● 共産主義社会の示唆

「…共同体生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」【新版① p. 140】

◎ 共同体生産手段：私的所有によるバラバラ状態ではない

私的所有=生産手段の所有者が生産物の所有

⇒ 共同所有=生産物の共同所有

◎ 自覚的に一つの社会的労働力として支出：労働の社会性

◎ 自由な人々の連合体：従属させられない自由な存在としての人間

= 過去と現在、現在と未来の社会の姿

■ 資本主義の「生成・発展・没落」の法則を明示

● 『資本論』第二版あとがき

「この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的である」

【新版① pp. 33-34】

◎ 弁証法¹：モノ（事物）やコト（命題）が「否定」を通じて、新たな・より高次のモノやコトへと再生成されるというプロセス（「正（テーゼ）」「反（アンチテーゼ）」「合（ジンテーゼ）」）で示す

◎ 現存するもの：資本主義社会

◎ 肯定的理解：資本主義が、人類の歴史の中でどのような役割を果たし、社会にどのような進歩をもたらしたのか、そのことを理解するということ（進歩的理解）

◎ 必然的没落の理解：資本主義社会が、その発展においてどのような矛盾や危機をもたらし、社会変革の諸条件をどのようにして作り出し、どのような新しい社会に交代するのか、そのことを明らかにすること

⇒ 資本主義社会：より高度な社会に交代する必然性をもった社会

= 生成・発展・没落の法則を解明

= 『資本論』の根本的立場であり、革命的真髓

（3）先人の研究を網羅

○ 分析方法の相違

¹ 例：「美しい花」=正→「花は枯れる」= 反 → 「実（種）として次世代を創る」= 合。

- 古典派：基礎的な関係と高度な関係も平面に並存（土台も最上階も同じ平面）
 - リカード：価値法則と平均利潤率の法則を同じ平面で両立させ分析
- マルクス：基礎的な関係から高度な関係への積み上げ（「発生論」的方法）
 - ⇒ 単純から複雑へ
 - ☞ 「以前のすべての経済学が、地代や利潤や利子という固定的な形態をもつて いる剰余価値の特殊な諸断片を、はじめから、与えられたものとして取り扱っているのとは反対に、僕は、まず第一に、すべてのこれらのものがまだ分 解しないでいわば溶液状態で存在しているところの、剰余価値の一般的な形 態を取り扱っているということ。」【全集② p. 10】
- 踏襲と批判
 - 古典派：労働価値と商品の二重性（使用価値・交換価値）
 - マルクス：商品と労働の二重性（具体的有用労働・抽象的人間労働）
 - ☞ 「僕の本のなかの最良の点は次の二点だ。(1)（これは事実のいっさいの理解 がもとづいている）第一章ですぐに強調されているような、使用価値で表さ れるか交換価値で表されるかに従っての労働の二重性、(2) 剰余価値を利潤 や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているとい うこと。ことに、第二巻（＝第二部——宮崎）ではこれが明らかになるであろ う。これらの特殊な諸形態をいつでも一般的な形態と混同している古典派経 済学におけるこれら取扱いは、ごった煮のようなものだ。」（「マルクスからエ ンゲルスへ」1867年8月24日全集① p. 273）
 - ☞ 「商品が使用価値と交換価値との二重物だとすれば、商品に表される労働も 二重の性格をもつていなければならぬ。という簡単なことを経済学者たち は例外なく見落としていたのだが、他方、スミスやリカードウなどにおける ような単なる労働への単なる分解は至るところで不可解なものにぶつからざ るをえない、ということ。」【全集② p. 10】】

★ 根本的な立場

- ① 資本主義社会は、永久に不滅ではない
 - ⇒ 人類史において、「一時的、経過的な社会」である
- ② 社会変革の条件：自然に自動的には起こらない
 - ⇒ 客観的条件+主体的条件の成熟 ⇒ 変革の現実化
 - 労働者階級が搾取から自らの命と暮らしを守る戦い=「訓練」
 - 自分自身の「組織」を勝ち取る → 体制変革する戦いの発展
 - = 社会変革を進める主体的条件の発展が不可欠
- ★ 「労働者階級の『聖書』」（エンゲルス【新版① p. 48】）
 - ⇒ 資本主義社会の次を展望する運動のための理論

『資本論』=「労働者階級の大きな運動の基本的諸原理」 【新版① p. 48】

3. 難解な『資本論』

○ マルクスからの応援歌

「真理を切望する読書にまえもってこのことをお知らせし、心がまえをしていただく以外には私にはどうしようもありません。学問にとって平坦な大道はありません。そして、学問の険しい小道をよじ登る苦労を恐れない人々だけが、その輝く頂上にたどりつく幸運にめぐまれるのである。」 【新版① p. 36】

○ 浜矩子氏「経済学の世界におけるピカソ」

「ある一つの事象や論点を、徹底的に360度方式で語り尽くさないと、マルクス先生は気が済まない。3次元的にみせるだけではいけない。展開図的に示したい。ピカソの絵みたいな全方位性をもって、折り鶴を解体してみせてくれる。そして、それを緻密にやればやるほど、文章が長くなり、込み入ってくる。」

【『しんぶん赤旗』2020年1月31日】

○ 文学表現の塊

川上重人『名作が踊る『資本論』の世界：シェイクスピア、ダンテ、セルバンテス、シラー、ハイネ…』

4. 『資本論』の構成

(1) 三部構成

- 第一部「資本の生産過程」：資本と資本主義の本質を把握
- 第二部「資本の流通過程」：自己増殖する資本の運動の本質を把握
- 第三部「資本主義的生産の総過程」：資本主義の現実的姿を把握

➡ 抽象から具体へ、そして総合的解明

資本主義経済の原基形態の「商品」から始まる（第一章）

(2) 第一部「資本の生産過程」のポイント

○ 商品としての労働力

● 商品：使用価値と価値の統一物、等価交換

資本家と労働者との間での交換：商品としての労働力

● 労働力商品の価値：労働力の再生産費用

その価値通りに労働力は資本家によって購買（等価交換）

資本家は購買した価値以上に労働力を使用（使用価値の発揮）

⇒ 労働力の価値 < 使用価値の発揮 = 剰余価値 = 壓取

○ 労働力商品の特殊性

- 一般商品 : $W - G - W$: 消費、欲求の充足 = 使用価値が目的
- 労働力 : $G - W - G'$: 価値の増殖
 \Rightarrow 「この運動の意識的な担い手として、貨幣所有者は資本家になる。」

【新版② p. 266】

○ 飽くなき価値増殖への欲求

- 「…資本家は商品交換の法則を楯に取る。彼は、他のすべての買い手と同じように、彼の商品の使用価値からできる限り大きな効用を手に入れようとする。」
 \Rightarrow 労働時間（労働日）の延長 = 絶対的剩余価値の生産
- 絶対的剩余価値の生産の限界：生理的・肉体的・社会的限界の克服
 \Rightarrow 生産力の発展による相対的剩余価値の生産
- ➡ 剰余価値生産を推進動機として、生産力を高めることによって、相対的剩余価値の生産を競い合う弱肉強食の社会
 \Rightarrow 利潤第一主義が資本の本質
- ➡ 資本主義：利潤第一主義という資本の本性から生産力の発展を競い合う社会
 \Rightarrow 資本の宿命：飽くなき価値増殖

★ 資本の推進動機=剰余価値生産（利潤第一主義）が労働者の搾取によって成り立っており、19世紀マルクスの時代から21世紀の現代に至るまでその動機と搾取は貫徹し続けている。